一般社団法人サポートセンターＨＯＰＥの軌跡

私は、沖縄本島で放課後等児童デイサービス３年、児童館１年、こども園２年を経験させてもらった後、令和４年に石垣に戻り、法人の運営する、「石垣市子どもセンター（児童館）」、「みらいの宝学童クラブ」、まきら子どもホッ！とステーション（こどもの居場所運営支援事業）」に携わらせてもらった。現在は令和７年１月にオープンした石垣市新川児童館の館長をさせて頂いている。

一般社団法人サポートセンターＨＯＰＥは、石垣市子どもセンター（児童館）を中心に、フードバンク、子ども食堂、無料塾、子ども若者支援、ひとり親支援、不登校支援など、多面的な子ども・家庭支援を行ってきた。１５年前、石垣島には児童館が一つも存在していなかった。そこで、法人の代表である山里世紀子が保護者たちと共に声を上げ、行政を動かし、健康福祉センター内の元リハビリ室を活用し、平成２２年２月「石垣市子どもセンター」が誕生した。平成２８年に市直営から公設民営へ移行し、サポートセンターＨＯＰＥが受託運営を行っている。

長年の様々な活動の中で、私たちＨＯＰＥは石垣島の様々な子どもの支援に関わり、石垣島の現状や今後の課題、児童館、学童クラブ、子どもの居場所等にどんな使命があるのか、沢山の学びを得ることができた。その中で３つの実践報告をしたいと思う。

新川地域での開放された学童クラブの挑戦

１つ目は、新川地域で立ち上げた学童クラブ「みらいの宝学童クラブ」である。地域の保護者から「子どもの居場所をつくってほしい」「子どもが行ける施設がない」という声を受けて開所した。新川は昔から漁業関係の住民が多く、子どもにトラブルがあると「荒くれ者」「海人の子だから」と偏見を受けやすい土地柄であり、放課後の子どもの居

場所は皆無だった。

その中で私たちは、学童に入所している子だけでなく、地域の子どもも気軽に立ち寄れる「児童館のような学童クラブ」を目指した。もちろん学童クラブの役割は果たしつつ、地域の子ども達と学童クラブの子ども達を分け隔てない運営を続けた。地域には、ふらふらと一人で歩く子、表情が暗い子、服が汚れている子など、様々な問題を抱えた子ども達がいた。地域の子どもたちも参加できるように庭遊びやプール、誕生日会、ハロウィン仮装行列、クリスマス会などの開かれた行事を心がけた。地域の子の保護者から何かクレームが来るのでは、と心配もしたが、実際には「クレーム」も「お礼」もなく、挨拶すら返ってこない家庭も多かった。普段から子どもに対する無関心さを感じていたが、親自身も人との関わり方が分からない「生きづらさ」を抱えていることを知った。私たちは、そのような保護者を虐待やネグレクトとは呼ばず「不器用な保護者」なんだと認識するようにし、温かく見守るようにしている。学童行事に参加した子どもたちが「家でやったことがない」「楽しい」と目を輝かせる姿を何度も見ることができた。これらの経験が、子どもへの適切な環境提供がいかに重要かを改めて示してくれた。

新川地域の公園活動（とびだせ児童館）で見えてきたもの

学童で特に力を入れていたのが、公園活動である。週に３回、午後３時３０分から５時まで、地域の子ども達をひっくるめた「遊びの支援（とびだせ児童館）」をする活動を行った。当初、行政からは、「誰が責任を取るのか？」「前例がない」と否定されていたが、「子ども達の成長は待ってくれない」と自身を鼓舞し、とびだせ児童館のような、「学童クラブの公園活動」として実施することにした。学童クラブに通っている子にとっても、地域の子達にとっても、大切な人的環境になるこの活

動。地域資源の「公園」を利用して取り組んだ。公園活動をする中で面白い変化があった。この公園はもともと遊んでいる子どもが少なく、ゴミが沢山捨ててあり、唯一いる子どもは東屋でゲームやポケモンカードをしている状況の公園だった。そんな子ども達に遊びの魅力を伝えるのは至難の業だったが、我々学童クラブが始めに取り組んだのは、とにかく根気強く遊びに誘い、遊びを魅せて、沢山認めることを重点的に行うことだった。学童クラブが公園に来る日時を一人一人に伝え、毎週遊びを繰り返していると、人が人を呼び、なんと公園に来る時間に合わせて、地域の子達がわんさか集まってくるようになった。学童クラブから列に並んでぞろぞろと公園に向かう際、公園の端に固まった子ども達が「学童が来たぞー」「今日はなにするー？」と大勢押し寄せる瞬間は衝撃だった。学童クラブが帰る時間になると、地域の子ども達は一斉に解散し公園には誰もいなくなる。この面白い現象を見たとき、我々が取り組んできた活動が認められたような嬉しい気持ちになった。しかしそれと同時に、この地域には「大人との関わりを求めている子ども達が多い」ということを痛感し寂しさも覚えた。公園にいる子どものほとんどが、「家で相手にされていない」「電子機器が親代わり」「遊びの経験が乏しい」のだ。平凡な遊びでも目を輝かせて食いついてくる子ども達を見て、そんな現状が石垣島でも起こっていることを改めて知る機会になった。また、ネグレクトや貧困家庭ほど、お金を沢山持ち、ゲーム機やスマホ、キラキラのポケモンカードをたくさん持っている。さらに、友達にジュースをおごったり、カードをあげたりして友達に見栄を張っている。これは、生活の中でお金の大切さや価値を教えてもらえてない証拠である（不適切な生活）。また、子育てをゲーム機やスマホ等の娯楽に頼りすぎた結果、親子の関係性が乏しい（愛着不足）。お金やゲーム機

スマホを無制限に渡してしまい遊びの中で人とのかかわり方を学べていない（遊びの乏しさ）。この「愛着不足・不適切な生活・遊びの乏しさ」が貧困家庭の連鎖や発達の遅れ、引きこもり、不登校の大きな原因の一つになっていると私は考える。　これらの原因が顕著に出ている一番印象的だった出来事があった。公園に行くとよくポケモンカードが大量に落ちていた。最初は「忘れ物かな？」くらいに思っていた。そんなある日、１年生の男の子Ａ君が遊具の一番上から、「無料祭（むりょうさい）」と称して、ポケモンカードが欲しい子にばらまいていたのである。理由を聞くと「いらない雑魚カードだからあげてる」「また買えばいいし」「キラカードだけ取って、ゴミも雑魚カードも捨ててるよ」とのこと。悪びれもなく、「良いことをしているんだ」という笑顔で１年生が語っているのだ。毎日、千円をもらいポケモンカードに費やしているとのこと。この家庭は、県外から来た３年生、１年生、乳幼児の妹、両親の５人家族。休みの日は朝８時頃から「外行ってこい」と家から追い出され、そのまま夜７時頃まで公園で時間を潰し、暇になったら学童に遊びに来ている兄弟だった。この兄弟はいつも「この学童に入りたい」と嘆いていたが、「お父さんとお母さんに聞いてみてね」と言うしかなかった。でも実は、一度お父さんと学童クラブを見に来たことがあるとのこと。その時父親が発した言葉が「こんな狭いところで過ごしていたらキチガイになる。外で遊べ」だったそう。もちろん、自慢できるほど広い学童クラブではなかったが、子どもに対して使ってほしくない言葉だ。大好きなお父さんの言葉を聞いて、Ａ君兄弟は何を思ったのだろうか。それを確認することが出来ないまま、この兄弟は沖縄本島に引っ越していった。

このような家庭は石垣の氷山の一角であり、マルトリートメントな家

庭が山ほど存在しているのは、まぎれもない事実である。 またここで興味深かったのが、学童クラブに入所している子ども達である。公園に行くと集団遊びには参加せず、土いじりやぼーっとブランコに座って時間が過ぎるのを待っているだけなのだ。学童クラブだけの集団遊びには参加するのに、地域の子が混ざるのを嫌がる。それに対し地域の子ども達は、学童クラブの子達に積極的に関わり、学童職員にもべったり。「つぎはどんな遊び？早く遊ぼう！」と遊びにも人との関わりに対しても貪欲であった。 ここで学童クラブのデメリットに気づくことができた。主体的に公園に集まっている地域の子に対し、学童の子は大人がいる中で過ごすのが当たり前で遊びも生活も常に受動的。家庭は娯楽にあふれており、主体的に自ら挑戦する意欲が削がれている子ども達が多い。また学童クラブは、学童全体の動きに合わせなければならず、一人ひとりの発達に合わせた支援・活動は難しい。特に高学年は発達段階的に、放課後の自由な時間に好きなグループで集まり、時にはケンカもしながら大人のいない場所で同年代での関わりも必要になってくる。年下が多い学童クラブではこれが特に難しい。また、学童クラブの保護者に関しては、安心安全に過敏な反応を見せるが、子ども達の成長や課題を伝えても無関心なことが多く、家庭外での子どもの変化や困りごとには興味がない。我々はそんな状態を「過保護な無関心」と呼んでいる。子育てがサービス化し、大人の時間を確保することや、放課後の時間に起こるリスクを避けるためだけに学童を利用することが増えている。その為、学童クラブは「子どもの人権を無視した、自立を阻害する施設」になってしまっているのでは、と我々は感じるようになってきた。しかし、だからこそ学童クラブは、見守りやおやつ・宿題だけではなく、発達に合わせた生活と遊びの支援を心がけ、常に質の高い、専門性のある

施設を目指していかなければならない。学童クラブが悪なのではなく、発達に合わせた利用の仕方が大切であり、利用する側も運営する側も、大人の事情ではなく、子どもの発達を考えた利用を考えなければならない。そんな学童クラブのデメリットに気づくことが出来たのも、児童館と学童クラブを両方運営したことによる良い結果だと思う。子どもの居場所を増やすために立ち上げ運営してきたが、学童クラブだけでは地域を巻き込んだ健全育成には限界があると感じ、学童クラブを活用した地域の支援・活動を終了した。５年という短い期間だったが、遊びの楽しさを知り、社会性を学び、第三者の大人との関わりで、心を満たす経験を地域の子ども達に提供できたことが、子ども達の将来に何らかの好影響があることを信じている。

１０年取り組んだ児童館型の「子どもの居場所事業」

２つ目の経験は、真喜良地域で取り組んできた児童館型のこどもの居場所事業である。真喜良第二団地集会室で３年間の「とびだせ児童館」、真喜良第三団地の集会室で７年７ヶ月の子どもの居場所運営支援事業「まきら子どもホッ！とステーション」を実施し、地域に根ざした遊びと生活支援を続けてきた。

この真喜良地域という場所には、かつて沖縄本島・屋慶名（やけな）地域からの人が移り住んだことがキッカケで「あそこはよそ者の地域」「貧乏人の集まり」「やきな～（方言）には近づくな」と差別的な扱いを受けてきた歴史がある。その背景からか、現在でも貧困、ネグレクト、マルトリートメント、非行、不登校が多い地域となっている。私たちは、この地域にこそＨＯＰＥの使命があると信じ、とびだせ児童館と子どもの居場所運営支援事業を活用しながら、児童館型の子どもの居場所として運営してきた。

当初の２年間は、行政が窓口で受付をしており、登録者数は４０名ほどで１日に 20 名程度、貧困家庭の子どもしか利用できなかった。その結果団地内を通る人から、「貧乏人だ」「かわいそうな子が行くところだ」「あの子は障害だから行けるんだよ」と指をさされ、新たなスティグマを生み出してしまった。またホッ！とステーションを利用したい保護者から「市役所に冷たい対応された」「もう窓口には一生行きたくない」等、失望・落胆を訴えに来る保護者も増え始めた。そこで窓口をＨＯＰＥに変更することを市に提案し、ＨＯＰＥを窓口にすることで、ハードルの低い地域の居場所を維持することが出来た。また、最後の２年間は完全自由来館へ移行し、今まで来られなかった「気になる子」も「遊びたいから来たよ」と気軽に誰でも立ち寄れるようになった。そのおかげで登録者数は９７名になり、一日に５２名が利用する日もあった。こども達は日々充実し、支援できる子が増え我々も喜んでいた。しかし行政からは「貧困世帯以外からはおやつ代を徴収すべきだ」「貧困対策なのに遊びと言われてもね…」「うちのお金で児童館がやりたいだけですよね？」などの批判を受けた。しかし、私たちは「遊びこそが貧困対策の根幹である」という信念を曲げなかった。施設で囲うだけ、おやつをあげるだけ、見守りをするだけでは貧困は解消しない。子どもが「楽しかった」「また明日もやろうね」と充実した毎日を積み重ね、人と関わり、心が動く経験を通してこそ、情操が豊かになり貧困の連鎖を断ち切ることが出来る。そう信じ運営を続けた。

１０年間の活動を経て、令和７年１月、真喜良地域の中心に、念願の児童館専用施設「新川児童館」が誕生した。１５年間訴え続けてきた「児童館建設」が実現し、現在、一般社団法人サポートセンターＨＯＰＥが指定管理者として児童館運営を担うことができている。

中高生が魅せた嬉しい成長

３つ目は令和７年１月にオープンした新川児童館である。指定管理が決まり、一番に大変だったことが中高生達の対応である。石垣市子どもセンターで、暴れん坊から頼れる存在に成長したはずの中高生が、新川児童館に来る小学生とつるむようになり、職員と敵対し始めたのだ。現在ならゆっくり対応できたが、オープン当初、１日３６０名近くの利用者をさばきながら、中高生を指導するのは骨が折れた。小学生からは「あの人たち怖い。もう児童館に来ない。」と言われ、その時怖がった小学生は一度も来なくなってしまった。乳幼児の保護者からは「あの人たちは大人ですか？子どもですか？危なくないですか？」と心配の声も増えた。もちろん来館している中高生は、いわゆる「困った子」で家庭にも学校にも地域にも居場所がない子ども達ばかり。感情のコントロールが難しく、手が出たり暴言を吐いたりすることもある。壁を殴る、気に入らない子を仲間外れにする、小学生とのドッジボールで激しく怒る等年齢に比べては幼く、警察にお世話になっている子もいる。「包丁で刺して殺してやる」と言われ、怖くてやめた職員もいた。段々児童館の雰囲気も雲行きが怪しくなり、早急に中高生への対応を考える必要があった。始めに実施したのは、職員２人体制の個人面談行うことだった。注意や指摘だけをすると暴れる可能性もあるため、事前に綿密な打ち合わせをして面談の内容を考えた。職員から「話がある」と言われた中高生は、身構え黙り、職員を警戒していたが、始めは雑談や職員からの悩み相談等を逆に投げかけた。中高生は意外な内容に拍子抜けした様子で、久しぶりの会話を楽しむことが出来た。その流れで児童館が困っていることや職員が見たい中高生の姿を話した。一人一人の課題は違うが、中高生らしい素敵な姿を見せてほしい旨を何度も何度も面談を繰り

返し伝えた。また、中高生がやりたがっていた、「中高生の居場所」（夜間開放）」や「お泊り会」を目標に掲げ、やりたいことの為に何をしなければならないのか？を考えさせた。少しずつだが思いは伝わり、児童館での振る舞いに変化が出てきた。特に、体の１番大きい高校１年生Ｂ君は、面談をきっかけにバスケ部に入部した。同年代や先輩との関わりが新鮮だったようで楽しそうにしている。一度他の世界を経験したからか、児童館の小学生達にも優しく振舞う姿が増えた。その後はコンビニのバイトも始め、同年代とマックに行った話をしてくれるようにもなった。一日も欠かさず児童館に来て暴れ・発散していた子が、外にも居場所を見つけたのである。「先生と話して色々考えた。俺が児童館の副館長になって守るよ」と話してくれるようにもなった。今はほとんど来館しないが、道端であった際に「月１は絶対に顔出しに来いよ。近況報告しに来ないと。これは命令です」と冗談交じりに伝えると、嬉しそうにしていた。今では、他の中高生に「人生は難しいよ。楽しまないといけないぜ」とふてぶてしく話している。トラブルを起こす中高生は、大人に蔑ろにされ、別の居場所では「あなたは立ち入り禁止」と大人に拒絶され続けてきた。そんな中高生たちの最後の居場所が新川児童館だったのかもしれない。この居場所が無かったら、この子達はどんな未来を迎えていたのだろうか。

現在は「中高生の居場所」を月水金の１８：００～２０：００まで実施している。一日に平均２５名、多い日で５６名の中高生が利用し、充実した中高生時間を過ごしている。職員と中高生で話し合い、「１８：００までは乳幼児と小学生に合わせた振る舞いをする」との条件で夜の時間を作っている。児童館で前に進むキッカケをつかみ、また新たな居場所を自分の力で切り開いていく姿を垣間見たことで、児童館の存在意

義を強く感じた出来事だった。

遊びと向き合った新川児童館 1 年目

また、オープン当初、多すぎる利用者に伴い「遊べない」「窮屈」「丁寧な関わりが出来ずルールや利用の仕方が浸透しない」ことに我々職員は頭を抱えた。また、体育館や芝生で遊びたい子は山ほどいて、全員の希望を叶えることはできない。中には、「バスケ部ですけどどうやって体育館の予約をしますか？」と市民体育館のように利用しに来る人も後を絶たない。また、気になる子があちこちでトラブルを起こす事態となった。また、遊びの経験が少ない低学年は置いてけぼりになり、高学年以下は怖くて遊べない、という状況にもなった。これではいけないと、初心に戻り「遊びは年齢も性別も障害の有無も飛び越え、皆が楽しく成長する場にしなくてはならない」「遊びは自由でなければならない」「トラブルやケンカはつきものだが、それをどうにかするために児童厚生員がいるんだ」と、再び職員一同遊びに向き合った。まずは、体育館や芝生に職員が必ず常駐し、気になる子に対し、事前の声掛け、トラブルを起こした際の解決方法、自分の気持ちの落ち着かせ方（アンガーマネジメント）、大きなトラブルになる前の静止、等を徹底した。また遊びの発達段階を重視し、プレイルーム（室内遊び）で一人遊びをしている子同士を繋げる関わりを増やしていった。そこで繋がった子達は楽しくなり始めると、次第に体を動かしたくなる為、芝生に連れ出し、竹馬・一輪車・鬼ごっこ・優しいドッジボール・優しいげんぺい・等の優しい遊びで友達と身体を動かして遊べるようにし、外遊びの楽しさを体験できるようにした。その遊びが上達し、研ぎ澄まされていくと、体育館でものすごいボールが飛び交う、ハードな集団遊びに参加できるようになる。という流れを水面下で行った。すると、「体育館で遊べない」のクレー

ムや「怖くて入れない」と消極的な子も減り、児童館それぞれの場所で年齢や性別ではなく、発達に合った遊びを誰もが楽しめるようになった。現在は遊びを職員が仕切らないようにし、子どもと一緒に遊びを決め、遊びに参加し、状況に応じて見守り、子どもに役割を持たせる等の遊び支援を毎日行っている。

新川児童館で叶えた子どもたちの児童館らしいステージ

日々の活動の中心に「遊び」を置きながら、児童館における芸術活動や体験活動にも力を入れた。その一つが小学生向けのクラブ活動だ。音楽クラブ、ダンスクラブ、バレーボールクラブ、卓球クラブ、韓国語クラブなど、子どもたちがやりたい気持ちを受け取り、存分に発揮できる環境を整えた。また、クラブの講師は職員が務め、入部も保護者の「やらせたい」ではなく、子ども達の「やりたい」でできるようにしている。理由は、「親に言われてやらされている子」を生みたくないということ。また、部活や習い事をさせてもらえない子や、児童館すらも「行くな」と言われている子に配慮した結果、保護者の承諾がいらない今の形になった。その成果がもっとも形となって現れたのが、令和７年１１月１日に開催された石垣島まつりでの音楽クラブ・ダンスクラブのステージ出演である。石垣島まつり出演の目的は、クラブの発表の場というのもあるが、会場に来ている子どもが誰でも参加できる、「児童館らしいステージ」を目指して取り組んだ。そんな、子ども達のバンド名は「やけなわらばーず」（やけなのこども達）である。 昔、差別的に使われていた言葉だが、地域のこども達が輝いているよ！頑張っているよ！という想いが、おじー、おばーや地域の方に伝わり、「子ども達の輝きが地域に広がり、良い言葉に変わっていくように」という想いを込めて子ども達と考えた。また、「やけなわらばーず」は冒頭で話した、「石垣

市子どもセンター」や「まきら子どもホッ！とステーション」で支援し続けてきた子ども達が中心のメンバーである。そんなこども達は、「継続」することが苦手で、何をしても続かない子が多い。音楽クラブの練習の日は必ず誰かが欠席し、本番まで全員がそろった練習をすることは一度もなかった。しかし本番当日、メンバーの想いが初めて団結し、奇跡的に全員が揃った状態で念願の舞台を迎えることが出来たのである。子どもたちは自らの力でつくり上げた演目を堂々と披露し、最後は会場の子どもに参加を呼びかけ、０～１８歳１００人近くの大合唱を実現させた。見ていた保護者や地域の大人たちは大感動で拍手を送った。習い事をしていてもしていなくても、学童に通っていても通ってなくても、障害があってもなくても、経済的な貧困でも裕福でも、異年齢でも、誰でも平等に輝ける場をつくりたい。そんな児童館らしい思いが形になった瞬間だった。

石垣島の現状

石垣島まつりへの出演は、石垣島の現状を物語る象徴的な出来事の一つであった。市内最大規模の祭りで、子ども達があれほど堂々と輝いた姿は、地域に大きなインパクトを与えた。しかし、翌日の地元新聞を見てみると、紙面の多くを占めていたのは、観光目的のフラダンスや外部からの来島者の出し物であり、地元の子ども達についての記事はほとんど見当たらなかった。地域の保護者からは「地元の子ども達が頑張った姿をなぜ取り上げてくれないのか」という声も寄せられた。子ども達の努力と輝きを知る私たちにとっても、それは強い違和感として胸に残った。しかし同時に「ならば私たちが、子ども達の輝きを地域に伝え続ける役割を担わなければならない」と、児童館としての使命を改めて認識する機会にもなった。

児童館の役割は単に子どもの居場所を確保することではない。地域性が消えつつあるこの現代、子ども達が主体的に学び、挑戦し、仲間と関わり合いながら成長していく土壌をつくることが重要視される。真喜良地域に拠点を置く新川児童館は、地域の文化・歴史・大人たちの経験を子ども達に結びつけ、世代をつなぐ橋渡しの役割を担う必要がある。児童館では、過ごす子ども達の表情は日々変わり、遊びが変わり、人間関係が変わり、「地域の中で育つ」という本来あるべき姿を少しずつ戻していきたいと強く思う。

この取り組みの根底には、「真喜良地域を幸せにしないと石垣島の幸せはない」という明確な信念がある。真喜良という一つの地域が元気になれば石垣島が元気になる。石垣島が元気になれば、やがて日本全体の未来も明るくなる。私たちはその信念を行動に移し、一つひとつの活動の中に意味を見出しながら児童館運営を続けて行きたい。

石垣島の課題と展望

一方で、石垣島の子ども・子育て支援の現場には課題も多い。沖縄本島や本土の後を追いかけて、子育てのサービス化が進み、様々な子どもの事業が増えているが、子どもを「金の生る木」と扱っている事業者も多い。行政と市民、多様な事業所の連携がうまく噛み合わず、本来守られるべき子ども達が置き去りになっている場面が多くみられる。私たちは「見て見ぬふり」をせず、現場で見てきた事実を丁寧に伝え続けることが必要だと感じている。また、石垣島は人材不足が顕著に表れている地域であり、高校卒業後は多くの若者が島外へ進学・就職するため、大学のない石垣島は新卒の人材がほとんどいない。現在は県外や海外から移住してきた人材に頼っている状態である。

このまま様々な子育てサービスの「預かり」を目的とした事業ばかり

を増やしていくと、子どもを預かる人手はますます足りなくなり質も下がる。また預かり施設が増えることで、子どもも保護者も自分で考え行動する力は育ちにくくなる。そうならないためにも、児童館のように地域に根ざし自由来館を重視した施設や、公園・公民館等を活用した誰でも集えて、遊べて、人と関われる、児童館のような「地域の居場所」を生み出していかなければならない。「地域で子育てをする」仕組みを一早く行政と連携しながら取り組んでいきたいと思う。

一般社団法人サポートセンターＨＯＰＥの使命

石垣市は沖縄本島よりも10年遅れていると言われている。そんな石垣島だが、子ども達の成長は待ってくれない。今を生きている子ども達が健全に、夢や希望をもって生きていくことができるようになるためには、「大人の尺度」で物事を決めつけてはならない。「学校に行かなくてもいいんだよ」「ゲームだけしていてもいいんだよ」「夜更かししていてもいいんだよ」「だってこどもがやりたいんだから」「私もそうだったから」と多様性を振りかざし、わざわざ子ども達の自立を阻害する方向へ促すのは適切ではない。「今しかできない子どもらしさ」や、「発達」の可能性、「愛着」、「生活」、「遊び」の重要性を大人がしっかり理解して関わらなければ、どんどんこの世の中は悪循環に陥っていく。 健全育成で巻き起こした風が石垣島全土に広がり、いつか「あの地域に住みたい」「あの地域みたいになりたい」と思ってもらえるような地域に変えていくことが、この石垣島を幸せな島にしていく第一歩なのである。いつか石垣島が先駆を走り、日本の地域モデルになれるくらいに！と大きな目標を立ててこれからも頑張りたい。どんな子どもにも「人と関わり、遊び、認められる経験」を保障するのが児童館であり、私たち大人の役割である。真喜良地域を幸せにすれば石垣島を幸せにできる。石垣

島を幸せにできれば日本を幸せにできる。その信念を胸に、これからも地域と子どもたちと共に歩み続けたい。

最後に

全国の志高く毎日奮闘している児童館職員・児童厚生員に「私達たちは日本の端っこで、こんなことをやっているよ」と聞いて欲しい気持ちと同時に「一緒に頑張りましょう」の激励を飛ばしたい。失礼な表現もあり、読んで嫌な思いをする人もいるかと思うが、誰かが言わなければ何も変わらないと思い、今回応募させて頂いた。

石垣島は、沖縄本島や本土から離れているため、手本となる健全育成のモデルが見えづらい。そのため、そもそも「健全育成とは何か」という基本的な考え方を共有すること自体が難しい地域である。その為、我々ＨＯＰＥが取り組んでいる活動は好奇な目で見られることが多い。実際に現在取り組んでいることが正しいのかさえも相談する相手がいないため分からない。だが、一緒に働く職員と「ああでもない、こうでもない」と必死に考えながら作り上げていく児童館の楽しさも感じている。「何でここまでするの？」と第三者から言われることも多い。「子どもたちの為に」という想いで動いた結果、いつか「児童館があってよかった」と話してくれる子どもたちになることを信じて頑張っている。石垣島全体を幸せにできるよう、まずは「目の前のこどもを幸せに」という想いで、地道に頑張り続けたい。